~二　世界宗教の経済倫理　序論~

まず本書で扱われる用語の解説をする。

世界宗教とは、儒教、ヒンドゥー教、仏教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教を指す。

宗教的経済倫理とは、ある行為を実践させる、宗教を根底とした機動力を指す。経済倫理とは主に経済地理や経済史により規定されるものであるが、倫理に基づいて実践される生活様式は宗教によって規定されている。よって、本書では宗教倫理に最も影響を与えた社会層の生活態度を決定した要因を分析していく。

各宗教の主な社会層

儒教……宦官

ヒンドゥー教……ブラフマン(教養者)が秩序を形成

　　　　　　　　　→平民的秘教者の登場(救世主信仰)

仏教……托鉢僧

イスラム教……訓練を積んだ信仰の戦士→スーフィー派下層市民指導者

ユダヤ教……賤民民族

キリスト教……都市市民

宗教倫理に影響を与えるものは?—————下部構造の分析

宗教倫理は一次的には、告知や約束という形で、宗教的な必要に適合されるものである。一方、社会構造によって宗教が規定されると言う説明もある(ルサンティマン等)。しかしその射程は検討すべきである。下部構造が宗教倫理に与える影響は苦難の評価に見られる。

1. 苦難=神の罰(幸福の神義論)

幸福な人間は自分の幸福の正当性を求める。幸福が名誉や権力と結びつくならば、それは権力者の利害関心の正当化を導く。

1. 苦難=聖(苦難の神義論)

苦難は非日常的な経験であり、その非日常性は聖なるものと見做された。そしてその非日常性は苦行によって近づきうる。

この苦難の経験は個人的な経験である。この個人的な宗教倫理が、共同態の宗教倫理(救済)と結合した時、教団などの組織、制度が発達した。この組織は大衆の救済を目指す(罪の告白等)。繰り返される困窮は集団的・合理的な「救世主」信仰へと繋がった。

来世信仰の登場

世界観の合理化は幸福罪の意味に疑いを生じさせた。なぜなら、善人にとって、余りにも苦悩が多い割には、現世において成功を収める者は「悪しき者」であったからである。これをうけて、宗教倫理は更に合理化する。つまり、インドの業や、予定説が説いた、来世での救済である。合理的宗教倫理の救いは、社会的に蔑視された層を基盤にした。現世で満ち足りた者は救いへの憧れに欠け、従って信仰に篤くないからである。こうして富・権力に対する不信が起こり、神に与えられた「使命」への信仰が起こる。

* 然し乍ら、救済財は、キリスト教等一部を例外として、健康や長寿と言った、実質的・彼岸的なものであった。ある宗教において、最高善とされるものは、宗教意識の担い手の違いによって多様化したのである。

宗教意識の担い手層と世界像

宗教意識の担い手は主に二つの集団に分けられる。

|  |  |
| --- | --- |
| 商工業者・知識人 | 騎士・農民・教権者 |

1. 商工業者・知識人

知識人は理論的合理主義の、商工業者は実践的合理主義の担い手としての役を果たした。